

原子力船むつ消失事件

西村京太郎



げん しりよく せん げん 原子力船むつ消失事件

にしむらきようたろう
西村京太郎



角川文庫 5806

昭和五十九年九月十日 初版発行
昭和六十三年四月十日 九版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三

編集部〇三—三八—八四五一

電話 営業部〇三—三八—八五二一

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

原子力船むつ消失事件

西村京太郎



目次

第一章	出航
第二章	搜索
第三章	疑惑
第四章	沈黙
第五章	汚染海域
第六章	写真
第七章	貨物船
第八章	イスラムの剣
第九章	アメリカ大使
第十章	タンカー
第十一章	決断
第十二章	帰国
解説	

郷
原
宏
三九

三九 三六 二九〇 二五五 二二〇 一八一 一六一 一一〇 三三 三五

第一章 出航

1

佐世保は、山と海と造船の町である。

背後の展望台に登ると、眼下に、佐世保の町が広がる。

海岸には、びっしりと、ドックが並ぶ。一時の造船景気はないが、それでも、建造の火花が飛んでいる。

・その一角に、他の船とは、少しばかり違う色彩の船が見える。

紫色の船側と、幅の広い、どう見てもスマートとはいえない、ずんぐりした船体をした原子力船「むつ」である。

他のドックには、出入り自由だが、「むつ」の修理が行われているドックだけは、二重の鉄網で、外部と遮断され、ガードマンが、絶えず、パトロールしている。

関係者は、一人ずつ、磁気を帯びたカードを持ち、それを、入口に設けられたボックスに差し込まなければならない。本物のカードなら、自動的に、入口の扉が開く。

それほど、警戒が嚴重なのは、原子力船そのものの秘密保持のためもあり、また、反対派の破壊工作に対処するためだった。

「むつ」は、昭和五十二年、試運転中に事故を起こし、原子炉の改修のために、青森県下北半島から、九州の佐世保に回された。

それ以来、三年余り、「むつ」は、忘れられた存在だった。

新しい母港が、なかなか決らないということが新聞の隅にのったり、改修費が高すぎるといった話が出たりもしたが、いずれも、マイナスの話題でしかなかった。

その「むつ」が、ようやく、改修工事をおえた。

新しい母港も、下北半島の関根浜と決った。

「むつ」は、果して、蘇ったのか、それとも、新たな重荷となるのか、誰にもわからない。

佐世保出港は、十月十八日の日曜日。大安吉日と決った。

その前日の十七日、原子力船むつ開発事業団の藤木は、田辺理事長と佐世保に着いた。

田辺が、佐世保に来たときの宿は、S荘と決っている。そこへ、予約しておくのも、秘書室長の藤木の仕事だった。

S荘は、佐世保で、もっとも古い旅館で、この町が、旧海軍の軍港だった頃、連合艦隊司令長官をはじめ、高級将校が、常宿としていたところだった。

今でも、歴代の司令官の名前が、ずらりと書き並べてあったり、額が飾ってあったりする。夕方、S荘に着くと、藤木は、ひとりで、タクシーを拾い、「むつ」が繫留されている岸壁

に行ってみた。

立入禁止で、ガードマンが立っている。

藤木が、身分証明書を示すと、ガードマンが、磁気カードで、扉を開けてくれた。

原子炉の改修を了えた「むつ」は、船側も新しく塗り直し、特徴のある船体を、横たえていた。

八千二百四十トンの「むつ」は、さして大きい船とはいえない。何十万トンというマンモスタンカーから見れば、むしろ、小さい船といえそうである。

世界の原子力船の中でも、ソビエトの原子力砕氷船などは、二万トン、三万トンの大きさである。

それでも、船というのは、実際に、埠頭^{かど}に立って見上げると、大きく見えるものだった。紫色の船体が、そそり立っているように見える。

藤木は、タラップを昇って行った。

出港は、明日だが、万一に備えて、十人の乗務員が、乗船している。

船橋^{ぶなはし}にいた一等航海士の浅井^{あさい}が、藤木を迎えてくれた。

浅井は、運輸省から事業団に出向して来たのだが、藤木とは、同じ二十九歳なので、親しくしていた。二人とも酒が強く、麻雀^{マージャン}好きだという共通点もあった。

浅井は、藤木を、船橋の下にあるサロンに案内した。

会食などに使えるように、大きなテーブルと、三十脚近い椅子^{いす}が置かれているが、日本初の

原子力船のサロンにしては、華やかさに欠けている。壁に絵が画いてあるわけではない。天井に、シャンデリアが輝いているわけでもない。床に、靴先くつさきが沈むようなじゅうたんが敷きつめてあるわけでもない。

壁には、安物の絵が一つだけ。床はリノリウム。ただ一つの色どりといえば、部屋の隅に、博多はくた人形が一つ置いてあるだけだった。

「むつ」が、貨物船として建造されたためもあるだろうし、原子炉関係に、金を使い過ぎて、他の箇所が節約されたということがあるかも知れない。

若い女性が、コーヒーを運んで来てくれた。

「新谷紀子君だ」

と、浅井が、紹介した。

「むつ」では、女性の乗組員を二人採用した。

原子力船が危険だという批判を、少しでも柔らげようという配慮のためもあるし、同時に、現地対策の意味もあった。

「むつ」の母港は、最初、青森県下北半島に決ったのだが、その時、少しでも、現地に恩恵がもたらされるようにということで、下北に住む女性一人を、採用したのである。その後佐世保で改修工事が始つてからは、佐世保で女性一人を採用した。

二人の名前は、藤木も書類の上で知っていたが、その一人に会うのは、初めてだった。新谷紀子は、佐世保採用の女性である。

彼女が、ニッコリ笑って、サロンを出て行くと、

「ちょっと、きれい過ぎるね」

と、藤木は、いった。

年齢は二十三歳。大学を卒業したあと、一年間、博多の銀行で働いていて、「むつ」の乗組員として採用された女性である。

すらりとした長身で、細面のなかなかの美人だった。

「航海中も、気になって仕方がないんじゃないか？ ああいう美人が、二人も乗っていたんじゃないあ」

藤木が、笑いながらいうと、浅井は、手を振って、

「船を走らせている時は、それどころじゃないよ。それに、この船は、日本中の注目を集めて、航海に出ることになる。航海といっても、明日からは、新たな母港に決った下北の関根浜まで回航することだね。今度こそ、ミスは許されない。船内で、スキャンダルでも起きれば、それこそ、マスコミや、国民から袋叩きにあい、原子力船計画は、完全に駄目になってしまうよ。そのくらいのことは、全員がわかっている筈だと思っているがね」

と、真顔でいった。

2

コーヒーをご馳走になったあと、藤木は、浅井と一緒に、船内を見て回った。

明日の航海は、浅井がいうように、新たな母港と決った関根浜への回航である。従って、改修工事の終わった原子炉は、使用できない。補助エンジンを使用して、ゆっくりと航海するわけだが、万一を考えて、船内の点検が必要だった。

甲板に出る。

船腹は紫、船橋は白だが、甲板は、緑に塗られている。

船の中央部に、問題の原子炉が据えられている。

M重工で造られた小型の原子炉である。小型といっても、安全のために、炉の周囲を、厚さ十センチのコンクリートで蔽っている。自然に、船の幅が大きくなる。そのため、この船は、長さの割りに幅の大きな、ずんぐりした型になった。

「おれの立場でいうと、あまり運転しやすい船とはいえないね。これは、ずんぐりした船型から来てるんだが」

甲板を歩きながら、浅井が、いった。

「あまり、心配させるなよ」

「何しろ、十年以上も前に建造された船だからね。当時としては、最新の機械を積んでいたが、今では、古くなってしまっている。レーダーも、もう旧式だよ。今は、気のきいた漁船でも、もっと、遠くまで見えるレーダーを積んでいる」

「原子炉の改修に、予算を食い過ぎたんでね」

「わかってる。このままでも、十分に動かせるさ。ただ、日本唯一の原子力船にしては、他

の機器がお粗末だけどね」

浅井は、肩をすくめた。

そうしたアンバランスな船だということは、関係者の一人として、藤木も知っている。サロンの造りも、その一つの例である。実験船の宿命かも知れない。

原子炉の横を通って、二人は、船の後部にある制御室に入った。

原子炉は、まだ稼動していないから、制御室も、眠っている。

それでも、二人の技師が、計器を見つめて、当直に当たっていた。

この制御室は、通常の船にはないものである。

ずらりと並ぶ計器類、特に、異常事態発生の際にのみ押す赤いスイッチが、いやでも、この船が、原子力で動く船だということを教えてくれる。

正確に言えば、加圧軽水冷却型の原子炉である。

たとえ小型でも、日本各地にある原子力発電所と同じなのだ。

原子炉によって、高温の蒸気を発生させ、それによって、タービンを回す。その過程は、原子力発電と全く同じである。原子力発電では、そのタービンで電気を起こし、「むつ」では、船を推進させるだけの違いだった。

従って、最近の相次ぐ原子力発電所の事故は、「むつ」にとっても、マイナスだった。

「しかし、おれは、絶対に、この船を原子力で動かしてみせるよ」

と、浅井は、陽^ひ焼^やけた顔でいった。

「一度も試運転せずに、廃船にしてしまつたら、それこそ、今までに使つた何百億という金が無駄になる。試運転をして、そのデータが残れば、たとえば、『むつ』が廃船になつても、いつか、そのデータが生きるんだからね」

「田辺理事長も、同じことを考えていて、一刻も早く、『むつ』の試運転が出来る状況を作るといつておられたよ」

「早く、そうして貰いたいね。補助エンジンで航海するんじゃあ、何のために原子炉を積んでいるのかわからないからな」

「ああ、わかつているよ。そのために、今、各方面に働きかけているんだ」と、藤木は、いった。

3

翌朝になると、ドックに通じるゲートは、表、裏とも、五百人を越す機動隊によって、ガードされた。

「むつ」の出港に合わせて、反対派の住民や、過激派の学生が押しかけて来るといふ情報が入つたからだつた。

午前十一時の出港が近づくと、式典に参加する人々が、「むつ」の繋がれている埠頭に集つて来た。

藤木が、田辺理事長に同行して、到着したのは、午前十時半である。

反対運動の方は、ゲート近くに、赤旗を持った三十人ばかりの若者が集っているだけで、予想されたような妨害は生れていなかった。

だが、二人の乗った車が、ゲートの前で止まり、藤木が、守衛に、田辺理事長の名前を告げているうちに、若者たちの間から、突然、小石が飛んで来て、車の窓に命中した。

田辺の顔を、新聞で知った人々が、石を投げたのだろう。

びしっという音と共に、窓ガラスに亀裂が入ったが、割れはしなかった。

背後で、警備の機動隊と、反対派の若者たちの争う声を聞きながら、二人を乗せた車は、造船所の中に走り込んだ。

「彼等の気持がわからんね」

と、田辺は、むしろ、悲しげにいった。

「原子力船に反対する気持がですか？」

「そうだ。老人たちは、保守的だから、原子力をやみくもに怖がるのもわかる。しかし、若者には、未来を見て、賢明に考えて欲しいんだ。未来の海は、原子力船が走り回るに決まっているんだからね」

「その未来に対する考え方が違うのかも知れませんが」

「彼等は、帆船ばかりの海を想像しているのかね」

午前十一時、かっきりに、式典が始まった。

まず、科学技術庁長官の中田が、いくらか、浪花節的な挨拶をした。

何度も、彼は、大きな身体をゆすって、「男」を強調した。

原子力船「むつ」に対して、さまざまな方面から、批判が浴びせられ、現在の日本には不必要だという意見も出た。

それに対して、科学技術庁長官の私は、「身体を張って、『むつ』を守って来ました」と、彼は、いった。

「——今、私が守って来た可愛い息子が、怪我^{けが}が治って、元気に、歩き出そうとしています。未来は、彼のものです。原子力船『むつ』の新たな船出を前にして、私は、これまでの苦勞を考え、涙が、あふれ出るのを、どうしようもないのであります」

彼は、本当に、指先で、涙を拭くようなポーズさえ見せた。

次に、挨拶した田辺の方は、もともと、技術畑の出身だけに、理性的な言葉を並べた。

「この『むつ』は、実験船として建造されました。その使命は、今も、変っていません。今回の航海は、新たな母港となった関根浜への回航ですが、一刻も早く、原子炉を使った試験航海をしたい。それが行われて、初めて、実験船としての『むつ』の使命が達成されるからです」

三人目に、「むつ」の改修を行ったS重工の社長が挨拶し、それで、式典が終った。

プラスチックバンドが鳴り、紙テープが飛び交う中で、原子力船「むつ」は、ゆっくりと、岸壁を離れて行った。

当初は、式典もなく、静かに出港することになっていたのだが、科学技術庁長官が、原子力

船「むつ」は、時代の要請によって造られたものである。何をこそこそ出港するのだ、堂々と出港せよといい、その鶴の一声で、プラスチックバンド入りの賑やかな出港になったのである。

藤木は、じっと、遠離って行く船体を見つめていた。

(やっと、出港したな)

と、いう気持である。

三陸沖での試験航海で、原子炉の故障が発見されてから、四年間かかって、ようやく、原子炉の改修が終った。もし、また事故を起こしたら、その時こそ、「むつ」は、廃船に追いやられるだろう。

「むつ」の甲板には、乗組員たちが並んで、手を振っている。その中には、若い二人の女性の姿も見えた。

佐世保港を出ると、海上保安庁の巡視船が近づいて来て、先導する形をとった。

ゲートの外では、ひとかたまりの反対派の人たちが、盛んに、「原子力船出て行け！」のシュプレヒコールをあげていたが、「むつ」が入って来るのではなく、出て行くだけに、あまり、氣勢はあがらない様子だった。

やがて、「むつ」の姿は、藤木たちの視界から消えた。

港外へ出たあと、ゆっくり、日本海を北上し、七日間をかけて、下北半島の外海に新しく母港にした関根浜に着くことになっている。

「むつ」の巡航速度は、十六・五ノットだが、これは、原子炉を稼動した場合である。今度